公開講演会
公開シンポジウム
13 : 05～14 : 50
芸術館

近代日本音楽の復古と革新　　鈴木鼓村と宮城道雄

登壇者　和田一久（京極流箏曲三代宗家）
千葉優子（宮城道雄記念館）
コメンテーター　スティーブン・G・ネルソン(法政大学)
趣旨説明・進行　遠藤　徹（東京学芸大学）

復古とは「古に復す」こと、革新は「新に革める」ことであり、一見相反する概念に見えるが、復古の思想は現状に何らかの問題を感じることから生じるものであり、それが懐古にとどまらず実際に行動をともなうときには、現状を変える力に転じることから必然的にある種の革新性をまとうことになる。その方向性は現状のどこに問題を感じているか、復すべき古の理想を何に見るかによって異なったものになる。また、復古の思想は理想化された古の追求であり、実際には古に復すという方向性にとどまらず、新たな展開を生むことも少なくない。こうした復古から革新・創新への展開は、古今東西の歴史の局面に度々現れる思潮であり、歴史を動かす一つの原動力とも言えるであろう。近代の日本はその典型的な例と言える。

周知のとおり明治維新は「諸事神武創業之始ニ原ツキ」（王政復古の大号令）という復古の理念にもとづきつつ、「旧来ノ陋習ヲ破リ」「智識ヲ世界二求メ」（五箇条の御誓文）た維新であった。こうした思潮のもとに近代日本の音楽史は展開したが、この公開シンポジウムでは、明治後期から昭和初期にかけて多くの新作を生み出し、日本音楽史に大きな足跡を残した鈴木鼓村（1875～1931／M8～S6）と宮城道雄（1894～1956／M27～S31）という2人の人物を取り上げる。

鈴木鼓村は明治前期から昭和初期にかけての箏曲家・作曲家・画家で、「八橋歿後二百年、山田流樹立から百年、古今組の唱導から五十年」（『日本音楽の話』）という箏曲の変革の歴史の自覚のもとに、明治後期に高安月郊、薄田泣菫らの新体詩を歌詞にした新しい箏曲の京極流を京都の寺町で創始した人物である。鼓村の箏曲は「古き革袋に新しき浪漫の酒を盛る」と喩えられたが、「古き革袋」は鼓村自身が「日本音楽を指して、邦楽と称する（中略）この邦楽なる語は、単に最近三百年の、徳川時代に於ける産出のものに限られて居るやうになつてゐるのは、甚だ遺憾千万な事であります」（「邦楽の変遷」）と述べているように近世箏曲に限るものではなかった。そして鼓村が日本音楽史を実践体験に基づいて深く考察していたことは大正２年（1913）に刊行された『日本音楽の話』や京都の江馬務主催の風俗研究会における活動などからうかがわれる。

一方の宮城道雄は明治後期から昭和前期にかけての箏曲家・作曲家で、新日本音楽運動を主導し数々の新曲を生んだ人物として広く知られる。宮城道雄も箏曲の史的展開の上に自己の創作を位置付けつつ、西洋音楽が擡頭してきた状況下における自身の創作について「一つには古楽を復活させて、これに現代的な色彩を加えること、今一つは洋楽の形式において、どこまでも邦楽発展の境地を作り出すこと」（「音楽の世界的大勢と日本音楽の立場」）、「伝統をあ

くまで生かすとともに新しい時代の流れに沿うところに東西芸術の融合、新文化の創造が生まれる」（「芸道つれづれぐさ」）などと述べている。

このように鈴木鼓村と宮城道雄はいずれも「古」を意識した上で「新」を創造したのであるが、実際に生み出された音楽にはかなりの相違がある。両者の生年には約20年の開きがあり、活躍した主要な場所も鈴木鼓村は京都、宮城道雄は東京という相違があったが、そのことを踏まえた上で、このシンポジウムでは鈴木鼓村と宮城道雄の事績をたどり、両者にとって「古」や「新」とは何か、「伝統」や「近代」をどう捉えていたか、次第に影響力を強めていった西洋音楽のことをどのように見ていたか、互いの音楽をどのように見ていたかといった問題を追求したい。

さて、先に述べたとおり、復古と革新は古今東西の歴史に度々見られた思潮であるが、日本をはじめ東洋・アジアの近代においては、英国の歴史家アーノルド・J・トインビー（1889〜1975）の謂う西欧諸国の挑戦（challenge）に対する非西洋世界の応戦（response）（『世界と西欧』等）の動きと連動している。そしてトインビーの言説を踏まえて平成８年（1996）に逝去された国際政治学者の高坂正堯氏（1934〜1996）は「確かに彼のいう「世界」、つまり非ヨーロッパ世界の反撃は二十世紀に始まりましたが、本当のドラマはこれから起こる気がします」と平成２年（1990）の講演の中で述べていたことが昨年書籍化された『歴史としての二十世紀』に見えるが、20世紀末の高坂氏の予見のごとく近代日本の事例は今後に起こる（あるいは現在起きつつある）ドラマの序章なのであろうか。このシンポジウムでは近代日本音楽史の一コマに光を当てるに過ぎないが、背後に広がるそうした問題にも思いを馳せられればと思う。

（遠藤　徹）